

早稲田大学 法学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(古漢1問、現代文2問)
難易度	昨年並み

〔大問別講評〕

一 古文。出典：『平中物語』。

《本文字数：約 1200 字＝昨年より約 100 字減少。設問数(漢文との合計)：10＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問一ノ一	標準	【文脈把握】直前の内容から判断する。
問一ノ二	標準	【文脈把握】傍線部の「これ」の指示内容を踏まえて判断する。
問一ノ三	やや難	【文脈把握】傍線部の直前とのつながり、及び、傍線部の「袖」から考える。
問一ノ四	やや易	【文脈把握】傍線部を直訳するだけでも、正解が分かる。
問一ノ五	標準	【文法問題】「なむ」の識別。形だけでは判断できないので、各選択肢を訳さねばならない。傍線部の「なむ」は「ぬ+む」。
問一ノ六	標準	【空欄補充】Aは標準レベルだが、Bがやや難しい。正確に文脈をつかむ必要がある。

一 漢文。出典：『緑窓新話』。

《本文字数：約 220 字＝昨年より約 40 字減少。》

問一ノ七・I	やや易	【空欄補充】ややこしい選択肢もなく、空欄の直前直後とのつながりから容易に判断できる。
問一ノ七・II	標準	【文脈把握】于祐の友人のセリフの内容を中心に判断する。
問一ノ七・III	やや易	【返り点】「固」は「もとヨリ」と読む。「未」は再読文字。
問一ノ七・IV	標準	【内容合致】古文と漢文の内容を正確につかめたかどうか。

二 評論文。「芸術の解釈」について。出典：今道友信『美について』。

《本文字数：約 3100 字＝昨年より約 700 字減少。設問数：8＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問二ノ一	やや易	【漢字書き取り】Bは文脈より語義を考える。
問二ノ二・X	標準	【空欄補充】本文1行目が根拠となる。
問二ノ二・Y	標準	【空欄補充】空欄Yの直前の「思想小説」の内容に見合うものを選ぶ。空欄Yの4行後の「高度な…」という表現もヒントとなる。
問二ノ三	やや難	【傍線部説明】エと迷うが、エでは「必然性」の説明が不足している。
問二ノ四	やや易	【傍線部理解】「要素に分析している」＝「還元する」という重要語句を理解していたか？ 傍線2の直後の「～に過ぎず」もヒントとなる。
問二ノ五	難	【傍線部説明】傍線3は1行前の「註釈」、及び、直前の2段落の内容を指す。ア・イで迷うが、イの「評釈」が不適切な表現である。
問二ノ六	難	【傍線部説明】ア・イで迷うが、アは「記号として普遍化」が不適切である。
問二ノ七	標準	【傍線部説明】傍線5の主語が1行前の「作品のもつ指示作用が」であることを確認し、後は消去法が有効である。
問二ノ八	標準	【内容合致】正解以外は、明らかな誤りがある。消去法が有効である。

三 説明文。「柳田国男」について。出典：鶴見太郎『柳田国男入門』。

《本文字数：約 3200 字＝昨年より約 300 字減少。設問数：7＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問三ノ一	やや易	【空欄補充】直前の内容をより強めている表現を選択する。
問三ノ二	やや易	【傍線部説明】傍線1の直前2行の言い換え表現を選択する。
問三ノ三・A	標準	【空欄補充】直前の「包括的」と対比的な表現を選択する。
問三ノ三・B	やや易	【空欄補充】前後より、柳田が「積極的にではないが」、国家の政策に迎合せず、「実証的な学風を堅持した」ことを読み取る。
問三ノ四	標準	【空欄補充】アも迷うが、「漂泊」がここでの主題であることから判断する。
問三ノ五	やや易	【傍線部説明】傍線2までの内容の要約的理解が試されている。消去法が有効である。
問三ノ六	やや易	【傍線部説明】前後の文脈から容易に判断できる。
問三ノ七	標準	【記述＝理由説明】植民地からの引き揚げ者が、柳田民俗学の射程に捉えきれていなかった点を、本文の表現を利用しながらまとめる。

〔総合コメント・今後の指針〕

昨年同様、漢文が半ば独立した形式で出題された。大問三が易化したため、法学部特有の論述問題は昨年よりは書きやすかったと思われる。ただ、そのぶん、大問一の古文と大問二の評論文が難化しているので、全体としては昨年並みの難易度であろう。昨年同様、時間に追われた受験生が多かったようだ。

大問一の古文は、『平中物語』の一節。主語を正確に把握していかないと大きく失点してしまう。焦らずに本文を精読できたかで合否が分かれるだろう。本文字数は、08 年が約 600 字であったのに対して、09 年が約 1300 字、本年度が約 1200 字、である。読みごたえのある長い古文に慣れておきたい。

漢文は、比較的易しめの設問が目立った。問一ノ七のⅡで差がつくと思われる。本文字数は、08 年が約 60 字であったのに対して、09 年が約 260 字、本年度が約 220 字、であり、半ば独立した形式の出題が定着してきた感がある。

大問二は、「芸術の解釈」についての評論文。抽象的な表現も多く、読みづらかった受験生が多かったと思われる。設問も標準レベル以上のものがほとんどで、なかでも問二ノ五、問二ノ六は難問であった。この大問二に時間をとられすぎると、比較的簡単な大問三に時間が回せなくなってしまう。

大問三は、「柳田国男」についての説明文。読みやすく、設問も基本的なものがほとんどなので高得点をとる必要があるだろう。問三ノ七は法学部特有の論述問題だが、本文全体をまとめる必要もなかったため、昨年の本文全体を要約するタイプよりも易化した。ただ、大問一の古文と大問二の評論文に時間がかかることを考えれば、しっかりとまとめた答案を完成させた受験生はそれほど多くはないかもしれない。この法学部特有の論述問題だが、08 年度は本文全体の内容をふまえてその延長を書かせるタイプ、09 年度は本文全体を要約させるタイプ、そして、本年度の本文の一部をまとめさせるタイプ、とここ数年、易化の傾向にある。